新ブランド「肥後牛」を育てる。

――肥後牛の消費拡大の動きを追って

偶数月の九日、私の住む阿蘇郡小国町では、牛の競市が開かれます。聞き取れない程早い競師の声と共に場内には熱気がこもり、引き出された牛と電光掲示板に人々の真剣な目が一斉に向けられます。

競場へ引き出す売主にもいくばくかの惜別の情はあるのでしょうが、いざ売るとなればやはり少しでも高く売れて欲しいものです。煙草をくゆらせながら、入場名簿をめくる購入者を見ると、その肥えた目にもそれぞれ思惑があるようです。

「肥後牛」の関東市場進出を狙って「肥後ビーフフェア」を開催。

県では、一月十日から三十一日まで、銀座、日本橋を中心とした都内の有名レストラン、肉料理専門店の協力を得て、「肥後ビーフフェア」を開きました。肥後の赤牛を「肥後牛」のブランド名で関東地方にまで消費拡大させようと県をあげて取り組んでいるものです。近年、食生活の向上でカロリー過多気味の食通にこそ、脂肪が比較的少なく赤身の多い肥後牛を味わって欲しいというのが、売り込みの謳い文句のようです。

「肥後牛」の評判は上々。さらにニーズに合わせた品質向上が大切のようです。

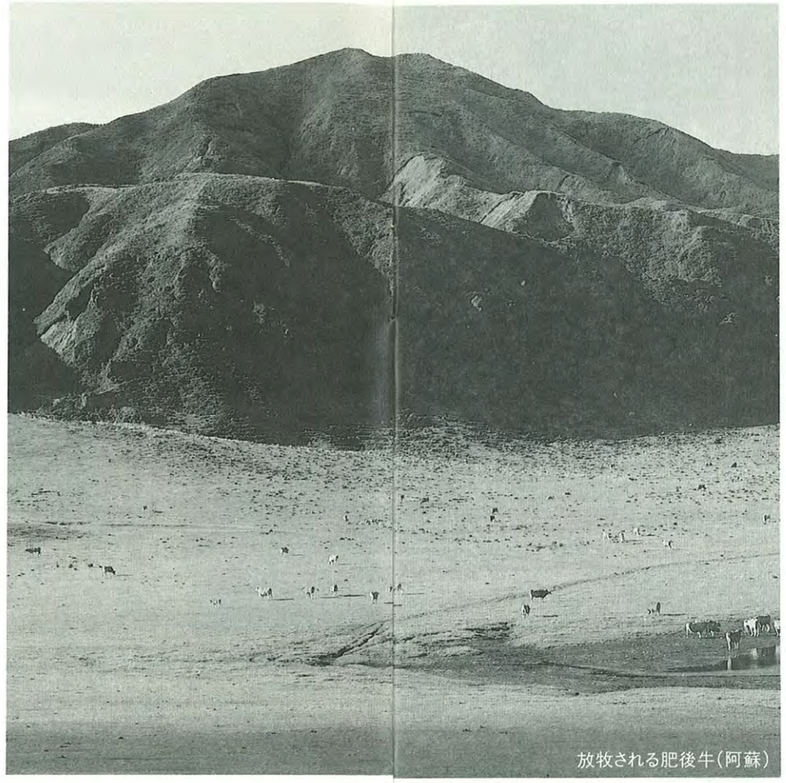
福岡天神にある「スエヒロ」を尋ね、反響の程を伺ってみました。和牛キャンペーンは、これまで何回か行っていたそうですが、県の主催でフェアを行ったのは今回が初めてだということです。匂い、肉質が良く、ボリュームもあるということで、味の方は八割方のお客さんが満足して帰られたようです。ただ、神戸牛や近江牛といったブランドものとあまり差のない価格が弱みとか。「少し高いのでは」という声もちらほらあったとのことです。コックさんたちの評判は、脂肪が比較的少ないので焼きやすいとまずまずでした。

店の話では、「輸入牛フェアより、和牛フェアをやりたいし、価格と供給が安定すれば、肥後ビーフをメニューに加えたい」とのことでした。牛を見るために、わざわざ生産農家まで足を運んでいるという調理長の弓削さんからは「これからは牛の血統書が欲しいですね。そういった肉質の保証があれば、肥後牛は肥後牛なりの特性があるのですから、上質和牛と輸入牛との中間層で伸びていく可能性も十分にあるでしょうね。」となかなか専門家らしい厳しいお言葉もいただきました。

やはり、お客さんの舌に合った肉質をつくるという努力の積み重ねが大切ということなのでしょう。バイオテクノロジーを駆使した肉質改善も、その意味では大切な事業ということになります。

調理長から肥後ビーフの特徴を聞く

ママさん特派員
平野たか子さん


放牧される肥後牛（阿蘇）

バイオテクノロジーによる資質改善でも、熊本は全国のトップクラス。

これまで、畜産農家では優良雄牛の精液を凍結精液として、県下に広め、子牛の改善がなされてきました。昨年度生まれた肥後牛三万頭の父牛は、なんと県内で厳選されたわずか五十頭ということです。ところがそれをさらに進めて、雌牛の側からも資質改善しようという研究が今盛んに行われています。最近、新聞やテレビで報導されている受精卵移植がそれです。本県では、成功率五〇％近くに達しており、全国でもトップクラスということです。現在は、受精卵移植の時期が難しいということで、とり出した受精卵を凍結させて保存しておくという新しい方法が試みられていました。この凍結受精卵移植は二十四頭に行われ、二頭がすでに誕生しています。

将来は雌雄の生み分け、一卵性多産児生産による増産も期待されています。実際、県下初の受精卵分割による双子牛が六月には生まれる予定だそうです。

地元消費者の理解が「肥後牛」ブランドを全国へ定着させると思います。

熊本県立畜産試験場を訪れた日も、ちょうど借り腹となる牛に受精卵移植が行われていました。研究室の顕微鏡で受精卵を覗いてみると、採卵された受精卵が手にとるようにはっきりと見えます。百五十ミクロンという小さな生命体ですが、数年もたつと、あの大きな肥後牛になるのかと思うと不思議な気分にさせられます。移植を受ける雌牛の方も、生殖能力を持ちながら、敢えて借り腹牛にさせられるというのは何とも悲しい話です。しかし、経済効果を考えれば、母牛が、繁殖能力に優れた子牛を産み、その孫牛が肉質にすぐれているというように、肥後牛が次々に改善され、評価を高めていくことはうれしいことです。

輸入牛との対抗、生産コストと販売価格のつりあいなど、生産農家にとっては、まだまだ厳しい現状ですが、まず地元熊本の消費者が肥後牛の良さを知り、さらに関東、関西へと消費を拡大し、「肥後牛」のブランドを全国に定着させて欲しいものです。

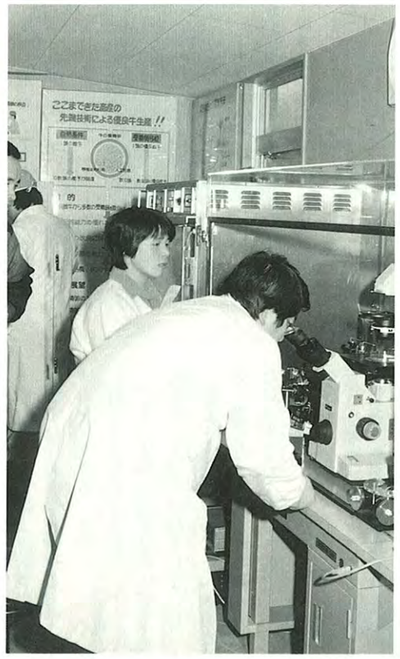
放牧に適した「肥後牛」は北海道でも育てられています。

取材中、十勝ワインで有名な北海道の池田町が、観光客に出すワインと組み合わせのステーキ用の肉として、わざわざ肥後牛を取り寄せ、放牧している話を耳にしました。育ちが良く、放牧に強いというのがその理由だということです。本家の熊本でも、訪れる観光客が、阿蘇の大草原を眺めながら肥後牛のステーキを味わう姿を思い浮べると、ちょっぴり楽しい気持になりました。

受精卵移植

牛は生涯に七、八頭の子供しか産めません。これに反して、すぐれた雌牛の子を一年に何頭も産ませようとする画期的な試みが「受精卵移植事業」です。

すでに、米国やカナダでは、年間二万頭以上がこの方法で生産され、商業ベースにのっています。

受精卵移植の手順としては、まず、受精卵を提供する優良な雌牛を選びます。この優良牛にホルモン処理を施し、一度に多くの卵を排卵させ、人工受精を行います。受精卵を特殊な器具で取り出し、複数の平凡な雌牛に移植して、子を産ませます。もちろん、生まれた子は優良な雌牛の子です。

今後は、一つの受精卵を分割して、二頭以上の子牛を生産したり、雌雄の生み分け、体外受精、核移植技術を使っての優良コピー牛の作成などの新技術への展開が考えられています。